

年寄りのぼやき

ネガティブ・ポジティブを判定する意味解析プログラムを作ろうとして挫折したことがある。本稿はそのとき気になったことを書いたものである。独りよがりの点も多々あると思うがご容赦願いたい。また、下記の「国分辞書群」はそのときの辞書である。

読みやすくするために例を少なくしてある。他の例も知りたい人は「国分辞書群」を参照されたい。

国分辞書群にある「備忘録.txt」というファイルはテレビなどを見ながら「メカブ」に載っていない用語を収集したものである。今でも更新している。

Homepage

<https://www.asahi-net.or.jp/~wd2y-kkb/>

国分辞書群

<https://github.com/kokubuyoshihiro/japanese-dictionary>

●逆引き辞書

日本語では品詞、意味、アクセントなど重要な情報が用語や文節の末尾に来る。似た用語を調べるのに便利なように、自立語辞書には逆引きの辞書を用意した。辞書名の拡張子が「rev」のものがそれである。

●漢字

日本語では漢字は文節の先頭を直観的に見つけるのに役に立つ。外国人が日本語では一つの漢字にいくつもの読みがあるので苦労していた。漢字の使用に次のような制限を設けではいかがなものだろうか。

1. 常用漢字以外の使用を禁止する。規則に外れ

る用語はすべて仮名書きにする。

2. 読み方を制限する。規則に外れる読み方はすべて仮名書きにする。

3. 異体字の使用を禁止する。異体字は自動的に標準の文字に置き換える。

●長音

現在ウ段、オ段の後の長音は「う」で、エ段の後の長音は「い」で記述することになっている。また、「通り」は「とおり」と長音を「お」で記述することになっている。なぜ長音を「ー」で記述しないのだろうか。どんな理由があったのか知らないけれども、昔、偉い先生が決めてしまったのだろう。私は全て長音を「ー」で記述すべきだと思っている。仮名記述に毒されていない視覚障害者の点字の世界では長音を「ー」で記述する。そうすれば次の区別もつく。

「こうし」

「仔牛」(こうし)か「格子」(こーし)

「ていたい」

「手痛い」(ていたい)か「停滞」(てーたい)

平仮名表記と片仮名表記の違い

「きゅうり」と「キューリ」

昔、点字のソフトを作っていたときに、頭が点字標記になってしまっていて、提出した書類の中の長音を「ー」で書いてしまったことがあった。受け取った人に不審そうな目で見られた。

●1音の時間的長さ

日本語では音の時間的な長さは皆等しいと思われる。しかし長音「ー」、促音「っ」、撥音「ん」の長さは少し短い。

面白いことにロシア語では普通の音と短い長音とは別の文字をあてている。チャイコフスキーは Чайковский と書く。

「キ」は「ки」と書き、後ろの長音「ー」は「й」と書く。「й」は短い「и」という文字である。

● J I S の表記の規格

J I S 規格では、「コンピューター」は「コンピュータ」と最後の長音を除いて表記することになっていた。「コンピュータ」と切って発音している人は聞いたことがない。やっと最近、一般の世界では J I S 規格は撲滅されて普通に使われている「コンピューター」になったようである。

● ヤ行エ段の音

ヤ行の音は「イ」から始まる遷移音でイ段の音は元々ない。ワ行の音は「ウ」から始まる半母音でウ段の音はない。ワ行には今は使われていないが、イ段の「ゐ、ヰ」、エ段の「ゑ、ヱ」という仮名がある。近年欧米語からの外来語が多いのでこれらの文字を復活させるべきだと思っている。ヤ行エ段の音の仮名文字がない。作るべきだと思っている。この音は「いえ」と書かれている。この音が入っているデータをソートしたときにうまくいかない。

ア段 イ段 ウ段 エ段 オ段
 や ゆ いえ よ

● ワ行の音

ワ行の音は「ウ」から始まる遷移音である。五十音表には「ワ」と「ヲ」しか残っていない。「ヲ」も一部の方言を除いて「オ」と発音されている。

欧米語由来の外来語が浸透している当節、「ゐ、ヰ」「ゑ、ヱ」を復活させるべきである。下記の新標記に示したようになる。

音をイメージして貰うためにワ行の音を現在使われている「ウ」を元にした拗音標記として表した。復活すると、この「ウ」を元にした拗音標記はなくなる。

新ワ行	拗音標記	現表記	新表記	英字
ワ	ウァ			
ヰ	ウィ	ウインドー	キンドー	window
		ウィーク	キーク	week
*				
ヱ	ウェ	ウエスト	エスト	waist
		ウェート	エート	weight
ヲ	ウォ	ウォーター	ヲーター	water

ここで述べた「ヲ」は、助詞の「を」との関係が問題になる。私の長野の友人は助詞の「を」を「ウォ」と発音している。

● 五十音

五十音というが音声的な特徴に注目して分けると 187 音になる。

拗音(キャ)、濁音をまとめた形で 1 音と数えた。長音(ー)、促音(ッ)、撥音(ン)も 1 音と数えた。

異音は除いた。

『ジ』『ヂ』は同じ音と数えた。

詳しくは Homepage の「パソコンがしゃべる」の表 1 音声的な特徴に注目して整理した音声の種類を参照されたい。

● アカサタナハマヤラワの順

調音点(子音を発音する際に息を遮る口腔内の位置)の順である。ハ行は、昔パ行だった。ヤ行、ワ行は半母音で調音点がないのでその後が続いている。現在の日本語では「ラ行」に調音点があるが、昔は英語のように発音するときに舌が口の中の何処にも付かなくて調音点がなかった。その結果として半母音の位置にある。

点字では母音(ア行)の後、喉の奥(カ行)から、唇(マ行)へと前に続く 7 つの行は子音、母音がきちんと整理してある。

● 擬音語・擬態語

日本語の言葉はその起源によって、大きく次の

三つに分けられる。

1. 日本語古来の言葉でいわゆる和語。

濁音、拗音を除いて五十音ともいわれ、音の種類がやや少ない。

語頭に濁音が来ない。連濁することがある。

2. 五世紀初め頃に伝わった漢語の音をまねた言葉でいわゆる漢語。

語頭に濁音が来得る。

3. 自然の音や、欧米語の音をまねた言葉でいわゆる擬音語・擬態語。オノマトペともいわれる。

ふつう、片仮名で書かれる。

いろいろな音を表すために「ファ」「フィ」「フェ」「フォ」などいくつかの和語にない音が許される。

「ン」「ッ」「ー」の音にもアクセント核が来得る。

ガ行の音は口濁音になる。

●「ジ」と「ヂ」および「ズ」と「ヅ」

同じ音に2つの仮名がある。昔の高知方言では別の音として扱っていたそうである。

ザ行の音は摩擦音であるべきであったが、イ段およびウ段の音は、舌が上になるので上顎に着いてしまう。その結果、破裂音になり、ダ行の音になってしまった。

元々の「ジ」の音を発音するには、舌が上顎に着かないようにして「ジ」の音を発音すればよい。

片仮名ではザ行の方を使うことを基本としている。

●連濁

和語の複合語を作るときで、後ろの用語の先頭の音が下記の音のとき、濁音になることがある。

カ行の音、サ行の音、タ行の音、ハ行の音

ハ行の音は半濁音になることもある。

特に助数詞では前の数字の仮名で書いたときの最後の音の影響で複雑な変化をする。前の数字の読み方にも影響を与える。

詳しくはHomepageの「パソコンがしゃべる」の数字、助数詞の読みとアクセントを参照されたい。

●ガ行鼻濁音

和語のガ行の音は次の条件のとき鼻濁音で発音される。

1. 助詞の「が」

2. 連濁したガ行の音

3. 撥音（ん）の後のガ行の音

漢字仮名のデータから音声でしゃべらせる音声合成装置を作ったことがある。鼻濁音にするかしないかは言語処理側で判定する。JISコードには鼻濁音に対応するコードがないので、装置に送るコードで困ったことがある。

●促音（っ）の後に濁音が来ない。

和語には、促音の後に濁音が来ることがなかったようである。ところが欧米からの外来語にはある。

今でも日本人には発音しにくいようで、テレビのアナウンサーも時々間違えて清音で読んでいる。

英字	仮名標記	間違えた読み
bed town	ベッドタウン	→ ベっとたうん
big data	ビッグデータ	→ びくくでーた
hand bag	ハンドバッグ	→ ハンドバック

こんな読み方をしていると手が後ろに回るぞ

●異音

一つの音を発音したときに口の中は次の音の準備をしている。仮名で書くと同じ文字の音が、実際の発音では前後の音との相互干渉によって変化する。変化した音を異音という。主なものを上げると。

長音（ー）直前の母音を伸ばす音で、直前の母音により変わる。

撥音（ん）直後の音によってm、n、など、さまざまに変わる。

シンボー mの音 辛抱

カンシャ	nの音	感謝
シンアイ		親愛
シンイ		真意
キンウン		金運
ハンエイ		繁栄
ハンノウ		反応

これらの音はすべて違う音になる。

促音（っ）

破裂音の前は破裂する前の無音状態が前に伸びて音がない。

一般 イッパン 音がない。

摩擦音の後ろの音の摩擦音部分が前に伸びて摩擦音だけになる。

一寸 イッスン

●無声化

子音だけが発音されて、母音の音が消えてしまう現象である。

無声化は次の条件のときに起こる。

1. その音が無声音である。
2. イ段、またはウ段の音である。
3. アクセント核でない。
4. 直後が無声音か最後である。

無声化が進んだ形で子音まで消えてしまって、促音（っ）だけになることもある。

例 三角形 サンカクケイ → サンカッケイ
さらにその促音までなくなることがある。

時計 トキケイ → トッケイ → トケイ
次の例では全部の音が無声化する。

「ふくしき」（複式）

この現象は関西方言では起こらない。聞いていると話している人が関西人かどうか分かる。

●アクセント

話し言葉ではアクセントが用語の意味を区別するために重要な役割を果たしている。

日本語のアクセントは高い音と低い音の2段階の違いである。ちなみに欧米語は強さや長さの違い

である。「ハ」と「シ」という2文字でできている言葉には「箸」、「橋」、「端」の3つが思い浮かぶ。

2文字の言葉だが、次の助詞にも影響を与えるので3種類の発音がある。

高い音を■、低い音を■で示すことにする。

箸が（ハシガ） 頭高 「ハ」の音が高い。

橋が（ハシガ） 尾高 「シ」の音が高い。

端が（ハシガ） 平板 「シ」と「ガ」の音が高い。

アクセントでひとかたまりの用語であることを示す。

一番電車（イチバンデンシヤ）が来た

一番電車（イチバン・デンシヤ）が好きだ

意味だけでなくアクセントも接尾辞に支配される。

議長兼（ギチョー・ケン）

議長職（ギチョーシヨク）

議長並（ギチョーナミ）

詳しいところは私のHomepageにある「パソコンがしゃべる」をご覧ください。

Homepage

<https://www.asahi-net.or.jp/~wd2y-kkb/>

●アクセントの滝

高い音から低い音に落ちる前の拍を「アクセントの滝」という。「アクセントの核」ともいう。平板型には落ちるところがないので滝はない。平板型を0として、先頭から滝のある拍の位置を数えて、一桁の数字で表すとアクセントを表示できる。

●聞き取りの慣れ

歳をとって周波数の高い音が聞きにくくなった。あまり聞かない言葉を聞いたときに耳に覚えのある別の言葉に聞こえてしまう。

下水事故のあった「八潮市」を、私が最近まで住んでいた「八千代市」と聞き違えてしまった。

●ら抜き言葉

テレビの出演者が「ら抜き言葉」でしゃべって

いても、画面の字幕では「ら」を入れた形で表示される。私を含めた年寄りが「ら」をいれてしゃべっているが、年寄りはいもうすぐいなくなる。

一段動詞のよく使われる「可能」をはっきり区別できるし、言文一致という観点からも「ら抜き言葉」を標準とするべきだ。

見られる	受身、尊敬、自発
見れる	可能

● violin

演奏会のパンフレットに violin を「ヴァイオリン」と書いてある。「ヴァ」は外来語の V の音を表したかったのだろう。しかし、読んだひとの発音を聞いても「バイオリン」で下唇を噛んではいない。V に対応する音は日本語に入ってきていない。パンフレットも「バイオリン」と書くべきである。彼らは「バイオリン」ではダサイと思っているのかな。

●「行った」の読み方

「いった」と「おこなった」の二つの読み方が許されている。

本来、送り仮名は読み方が一つに決まるように振ることになっているはずである。

昔は「おこなった」の意味のときは「行なった」と「な」を送るように指導された。

読み間違いを防ぐため「行なった」と「な」を送るべきである。

●活用形の例外

手元の文法書には活用形の表がある。5 段活用は 9 種類上げてあるが、教科書にない例外もある

1. 行った(行く) カ行 5 段連用形は「書いた」のように「い」となるべきだが「っ」となっている。
2. 問うた(問う) ワ行 5 段連用形は「買った」のように「っ」となるべきだが「う」となっている。

3. 下さいます(下さる) ラ行 5 段連用形は「乗ります」のように「り」となるべきだが「い」となっている。

古い形が使われている動詞もある。

ゆう(言う)
ゆく(行く)
うる(得る)

連体形

純粹の連体形は形容動詞の「な」だけしかない。文法書では形容動詞と整合性をとるためだけに動詞、形容詞も同じものを終止形と連体形として 2 つ設けてある。

●サ変動詞

語幹により次の 3 種類に分けられ、活用も異なる。

1. 標準サ変

単独で用いた場合と外来語に付いた場合

2. 和詞サ変

1 字からなる語幹に付いた場合。

3. 和詞ザ変

和詞サ変の特殊な形で、語幹の最後の音が「撥音(ん)」と「い」「う」の場合濁音になる。

終止形	受身形	使役受身
-----	-----	------

1. 標準サ変

発表する	発表される	発表させられる
------	-------	---------

2. 和語サ変

察する	察せられる	欠如している
-----	-------	--------

3. 和語ざ変

信ずる	信ぜられる	欠如している
-----	-------	--------

●意志動詞・無意志動詞

自動詞・他動詞という分類は欧米語の動詞の分類法を日本語文法に導入した概念である。日本語の動詞の分類には適当ではない。代わりに意志動詞・無意志動詞という分類法にする。

他動詞は動作の対象に「を格」をとるという説

明を見受けるが「野原に行く」のように移動性の動詞は自動詞でも「を格」を取る。

「する」は意志動詞で、「なる」は無意志動詞である。私の調べたかぎりサ行五段の動詞もすべて意志動詞である。

和語の動詞のなかには意志動詞・無意志動詞が対応した組み合わせが多数ある。

広げる	広がる
伸ばす	伸びる
割る	割れる

●意志動詞・無意志動詞が否定を伴った疑問文

否定を伴った疑問文の意味が意志動詞・無意志動詞と異なる。意志動詞のときは勧誘に、無意志動詞のときは否定疑問になる。

その結果「はい」と答えたときの意味も変わる。

質問		答え	結果
飲まないか	意志動詞	勧誘	はい
			飲む
飲めないか	無意志動詞	否定疑問	はい
			飲めない

●意志・推量の助動詞 「う・よう」

手元の文法書には意志にも推量にもなるとだけ書いてあるが、前の動詞によって決まる。

意志動詞に付いたとき	
	意志になる。 食べよう
無意志動詞に付いたとき	
	推量になる。 雨だろう

●動詞の連用形に別の動詞を付けて新たな動詞を作る組み合わせがある

組み合わせさせた動詞の活用などの性質は後ろに付いた動詞のものになる。

後ろに付いた動詞によって瞬間動詞か、継続動詞かも決まる。

書き終える	瞬間動詞
書き続ける	継続動詞

さらに後ろに付いた動詞の多義性によって、二つの性質を持つものもある。

書き出す	瞬間動詞	書き始める
書き出す	継続動詞	出力する

●時間的な前後関係を示す助動詞「た」

手元の文法書にはこの助動詞を「過去の助動詞」としてある。

「煮た大根」というと大根がすでに煮てあることを示す。「大根を煮た。」のように「た」の後ろに続くものがないときに「過去」になる。

連用形が欠落しているとしてあるが、接続助詞の「て」がその連用形である。「た」を「過去の助動詞」としてしまったため「て」を接続助詞にすることになった。

「て」を助動詞「た」の連用形と考えるもう一つの理由は、両方とも前の動詞によって同じように濁音化する。

終止形	連用形	
書いた	書いて	力行5段
飲んだ	飲んで	マ行5段

●補助動詞

本動詞の後に動作の時間的な前後関係を示す助動詞「た」の連用形「て」の後に付く動詞を補助動詞という、本動詞より時間的に後に行われることを示す。

例えば「来てみる」を別の言い方にすると「来て（から結果を）みる」になる。

逆に「見てくる」を別の言い方にすると「見て（後に）くる」になる。

これらの補助動詞は単独で用いたときと意味が異なる。補助動詞は平仮名で書く。

Homepageの「日本語楽」を参照されたい。

<https://www.asahi-net.or.jp/~wd2y-kkb/>

●前の動詞の状態を受け継ぐ「ている」

時間的な前後関係を示す助動詞「た」の連用形

「て」は、前の動詞の状態を受け継ぐ。

壊れている

壊れてしまった状態。瞬間に終わる動詞のときは結果。

休んでいる

休んでいる状態。継続する動詞のときは状態。

●使役受身「させられる」

意志の助動詞の後ろに受身の助動詞が付いたものを「使役受身」と呼ぶ。よく聞く言い方である。

書かさせられる 五段動詞

食べさせられる 一段動詞

来させられる カ変動詞

残業させられる サ変動詞

1文字からなる和語のサ変動詞ではこの活用形は欠落している。

●動詞「きる」

仮名で「きる」という動詞はラ行五段動詞と一段動詞の二つがある。否定形を調べて区別する。

終止形	否定形	活用	アクセント
切る	切らない	ラ行五段	頭高形
着る	着ない	一段動詞	平板形

●外来語の動詞

外来語の動詞は普通サ変動詞になる。少数だが良く見る動詞にラ行五段活用をする動詞がある。

トラブる	トラブった
ダブる	ダブった
ググる	ググった
牛耳る	牛耳った

●副詞

副詞は品詞のごみためと言われていた時代もあったが、最近はその機能で4種類に分類されている。

様態副詞

動詞に係って動作の様態を示す。

程度副詞

形容詞・形容動詞に係ってその程度を示す。

呼応の副詞

特定の付属語の組み合わせに係る。

数量副詞

数量詞に係る。

名詞に副助詞が付くことによって生成される副詞もある。

間違いばかり (している) 様態副詞

兄より (小さい) 程度副詞

他に

形容詞の連用形 例 青く

形容動詞のに形 例 元気に

動詞のて形 例 書いて

●程度副詞

形容詞を修飾できる副詞である。形容詞の程度を記述する。

次に状態表現が続く。

とても 良い

非常に 暑い

なかなか 発展している。

出現頻度の高い副詞で、くずれた形もある。

めっちゃ多い

めちゃめちゃ強い

次の例は例外で、様態副詞が形容詞を修飾している。

まだ早い

もう遅い

もうダメだ

●状態表現

状態を表す表現で、次の所は状態表現でなければならない。

程度副詞の後 とても *

双主文の後 象は鼻が *

では、どうしたら状態表現にできるか

形容詞・形容動詞で始まる文節。

補助動詞「ている」が付いた動詞。

ちなみに状態表現に対応する表現は、断定表現である。

形容動詞を除いて断定の助動詞「だ」が付いた文節

●呼応の副詞

特定の受けと呼応関係を形成する副詞である。

係 受け

ろくに ない、ありません、まい

恐らく だろう、でしょう、に違いない、はずだ

いったん たとしら、たら、からには、以上、ば、なら

●数量副詞

数量詞の前に付く用語で数量詞の後が副詞のように働く。副詞にするか前置詞にするか悩む用語のグループである。

ここでは副詞として扱う。

たった5本しかない。

ちょうど10人いる。

●接続詞

副詞は用言に係るが、接続詞は次の文に係る。

機能で次のように分類できる。

機能 例

順接 従って、そうして

逆接 けれども、かえって

添加 あわせて、いちだんと

対比 いっぽう、それに対して

転換 ところで、打って変わって

選択 もしくは、あるいわ

順序 続いて、まず

変化 徐々に、かなり

並列 並びに、かさねて

●副助詞の接続詞化

副助詞が独立して接続詞になるものがある。アクセントが変わるが機能は変わらない。副助詞の前が全て省略されたものと考えられる。

書いたけれども

→ けれども(受け付けられなかった。)

見たところで

→ ところで(次はどうしよう。)

休みにもかかわらず

→ にもかかわらず(働いた。)

●間投詞

挨拶、感嘆などのときの言葉である。これだけで一つの文を構成する。

ありがとう。

おはよう。

がんばりたいと思います。

ご愁傷さまです。

申し訳ありません。

●双主文

助詞の「は」で終わる文節の後に、「が」で終わる文節が続いた文で、主語が2つあるように見えるので双主文と呼ぶ。

この文について詳しく書いてある本がある。

「象は鼻が長い」三上章著

双主文の後には状態表現しか許されず、断定表現は許されない。

○この本は装丁が美しい

×この本は装丁が紙だ

●美化語

漢語には「ご」をつけて、和語には「お」を付けると教わった。

しかし漢語でも「お」を付けるものがある。

お台所、お化粧、お便所

逆に和語に「ご」を付けるものがある。

ごゆっくり、ごもつとも

欧米からの外来語でもよく使う言葉には「お」

を付ける。

おトイレ

むしろ身近な言葉に「お」を付けると言った方がよいだろう。

国分の Homepage の「美化語の調査」に資料があるので参照されたい

<https://www.asahi-net.or.jp/~wd2y-kkb/>

●接尾辞

付属語を意味する「辞」と表されているが、接合してできた用語の主要な部分である。品詞も、意味も、アクセントも接尾辞で決まる。

接尾辞	品詞	例
〇〇性	名詞	経済性
〇〇化	サ変動詞	抽象化
〇〇的	形容動詞	一般的
〇〇近い	形容詞	完成近い
〇〇兼	副詞	議長兼
〇〇人（にん）		推薦人
		今担当している人
〇〇人（じん）		日本人
		性質を持って生まれた人

「比較的」だけは例外で、接尾辞の「的」が付いているが、程度副詞である。

比較的よい

形容詞、形容動詞に付く接尾辞「さ」

全ての形容詞、形容動詞に付いて名詞を作る。一つの活用形にしてしまおうかと思ったこともあった。

●接頭辞

接尾辞は品詞まで変えるが、接頭辞は次に繋がる用語に先行して限定詞的に働く

サ変動詞に先行する	急、逆
数字に先行する	足かけ、享年
地名に先行する	新、東

人名に先行する 故、元、副

次の接頭辞は例外で名詞を形容動詞に変える。

高、低、不、無、非、未

例 未完成な

●助詞

名詞や副詞などの様々な語に付き、一部を除いて連用修飾格を形成する。

格助詞、副助詞、係助詞、接続助詞、終助詞、並立助詞の6種類に分けた。

同じ形の助詞が複数の分類に入るものがある。

「彼が書いたが」

「が」2つあるが最初の「が」は格助詞で、2番目の「が」は逆接の接続助詞である。

助詞が連続して用いられることがあるが、順序は決まっている。

副助詞＋格助詞＋係助詞＋終助詞

学校 だけ 十に 十も 十ね

6種類に分けたがほかにこれらの分類にはいない助詞がある。

1. 引用の「と」

伝達・思考動詞が続く。直前に何でも来うる。

と言う

と聞く

と思う

2. 目的の「に」 後ろに移動性の動詞が続く。

「彼の頼みについて、頼みに行く」

前の「に」は格助詞で、後ろの「に」が「目的の」である。「み」のアクセントが違う。

●格助詞

動詞に文法的な役割や、対象、意味を付け加える。

主格 が 動作の主体

「空が青い」
 連体修飾格 の 次の名詞を修飾
 「彼の家」
 さらにこの「の」が音便で撥音（ん）になることもある。
 「彼ん家行った」
 対象格 を 動作の対象「水を飲む」
 対象・場所時間 に 受身の対象、時間
 「学校に行く」「お昼に会う」
 方向 へ 移動の方向
 「故郷へ帰る」
 相手・並立 と 動作の相手、並列
 「先生と会う」
 起点 から 動作の起点
 「会社から帰る」
 起点 より 比較の基準
 「東京より南」
 場所・手段 で 動作の場所、手段
 「ネットで調べる」

●副助詞

付いた用語が副詞として働く。名詞や副詞などの様々な語に付き、多様な意味を付け加える。

限定 しか、だけ、のみ、ばかり、ばっかり
 程度 ほど、くらい、より
 程度副詞として働く
 例示 など、なんて なり、やら、か、
 でも、だって
 呼応 も、まで、さえ、しか
 呼応の副詞として働く
 取り立て は、こそ
 対比 は
 不確実 か、やら
 均等 ずつ

●係助詞

文中の言葉を取り立て、強調する役割を持つ。
 この分類がない分類法もある。

強調 は
 双主文での外の主語を表す。
 対比 も
 限定 こそ、さえ、しか、すら
 格助詞に付いて一緒に用いられることもある。
 には、にも、では

●接続助詞

活用のある語に付いて、前後の文節を繋ぎ、意味的な関係を添える役割を持つ

理由 ので、から
 逆説 が、けれど、ものの、ても、でも
 順接 から、ので、なら、ば、と
 並立 し、たり
 条件 ば、と
 同時 ながら、つつ

「て」、「で」は「時間的前後関係を示す助動詞た」の連用形でここでは扱わない。

●終助詞

文末に付加して、話し手の心的態度や感情を表現する。

疑問 か、かしら
 確認 ね、ねえ
 主張 よ、わ、さ、ぞ、ぜ、もの
 詠嘆 なあ
 主張 のだ、のね

●並立助詞

名詞などを対等な関係でつなぐ。
 と、とか、か、や、も、だの、だろうが、なり、
 たり、やら、の
 前後を入れ替えることもできる。
 $AとB = BとA$

これまで助詞について述べて来たが、この他に助詞に似た働きをする連語がある。

ならでは

まだしも
といえども

●助数詞

音声で読み上げるのに非常に複雑である。

前の数値によって、連濁するだけでなくアクセントも変化する。地方によっても異なる。

- 1本 イッポン
- 2本 ニホン
- 3本 サンボン
- 5本 ゴホン

十、百、千、万、億などの桁も助数詞で、ローマ数字を読むときはこれらの桁を漢字表記した読み方になる。

300本 (三百本) サンビヤッポン
小数点も読み方に影響を与える。

- 22 ニジューニ
- 22. 22 ニジューニ―テンニ―ニ―

詳しくはHomepageの「パソコンがしゃべる」の数字、助数詞の読みとアクセントを参照されたい。

●否定の「ない」

助動詞と形容詞の2種類ある。またアクセントも違う。丁寧な言い方に変えたときに違いが出る。

動かない 助動詞 「な」の音が低い。
動きません 動かず

花がない 形容詞 「な」の音が高い
花がありません

「ない」があっても否定とは限らない。

もったいない

やむをえない

ないでもない 二重否定

●構文解析

文節の係り受け関係を解析するもので、「係り受け解析」とも言われる。

次の関係に注目して解析する。

連体修飾格は、ほぼ直後の体言に係る。

連用修飾格は、用言に係る。文節には強さがあり、自分よりより弱い文節には係らない。

文節末	強さ
格助詞、副詞、副助詞	1
接続詞 接続助詞	2
文末 終助詞、	3

この仕事をやってみて、日本語には主語がないことを感じた。

「日本語に主語はいらない」金谷武洋著

●文節の係り受けの性質

文節の係り受けの性質は、文節の先頭の用語の品詞ではなく、文節の最後に付いている付属語によって決まる。解析するときは、文節の最後まで見ないと係り受けの性質が決まらない。構文解析のプログラムには、付属語が受けの性質を決める仕組みが必要である。

- 連用 き、
- 連用 動く。
- 連用 動きます。
- 連用 動いた。
- 連体 動きが、
- 連体 動きの
- 連用 抽象化する。
- 連体 抽象化が、

●形式名詞

連体修飾格を連用修飾格に変える。付属語なので平仮名で書く。

- 動く 連体修飾格
- 動くことが 連用修飾格

形式名詞「の」 昔は準体助詞と言われていたものである。

「書いたのが売れた」 「もの」の「も」が省略された。

●慣用句

単語の本来の意味とは異なる特定の意味を慣習的に表す決まり文句である。教導的な意味を持つものが多い。まとめて一つの用語のように働く。

構成している用語は、単独で用いたときとは違った意味を持っている。

古い言葉だけでなく新しく発生する慣用句もある。

サーバーを立てる
スタートラインに立つ
ハードルが高い
話がピーマンだ
ハンドルを切る

逆に削除すべき慣用句もある。

麻疹みたいなもの

また、慣用句が結合価を持ち、前の文節の受けになることもある。

彼がサーバーを立てる

●格助詞「の」を含んだ連語

日本語の語彙の少なさを補完するために複数の用語を「の」ではさんで、まとめて一つの用語にした連語がある。これも慣用句と言って良いのかもしれない。

構成している用語は、単独で用いたときとは違った意味を持っている。

阿吽の呼吸
手のひら
パンの耳
諸刃の剣
百葉の長
火の車
終の住処

●並列助詞「たり」を含んだ連語

対比する用語をまとめて、概念を表したものである。一つの用語のように扱う。

売ったり買ったり 売買
見たり聞いたり 見聞

飲んだり食ったり 飲食

●係り受け

例えば「終焉」という係の言葉に対する受けとしては「迎える」「の時」「告げる」などという言葉が思いつく。慣用句ほど一般性はないが、このような「係り」と「受け」の良く出てくる組み合わせを集めた。

約10,000組を集めた。受けの順にソートしたファイルも用意してある。

●謝辞

世の中全てがAIの時代になって何の役にも立たない記事をお読みいただいて感謝している。今回は一応これで終わる。国分辞書群はこれからも手を入れて行きます。

ご意見、ご質問がありましたらぜひ寄せられたい。

Homepage

<https://www.asahi-net.or.jp/~wd2y-kkb/>

国分辞書群

<https://github.com/kokubuyoshihiro/japanese-dictionary>

2026. 6. 13